

雪
の
螢

森村誠一

ほ
た
る

TA LAUNDRY





中公文庫

ゆき ほたる
雪の螢

定価はカバーに表示してあります。

1997年9月3日印刷

1997年9月18日発行

著者 もりむらせいいち
森村誠一

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Seiichi Morimura

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202937-6 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

雪　　の　　螢

森村 誠 一



中央公論社

目次

凶原虫	7
兇家 きようか	83
溯死水系 そし	141
雪の螢 ほたる	185
連鎖寄生眷属 けんぞく	243
殺意を抽く凶虫 ひ	291
神風 かみかぜ の殉愛 じゆんあい	345
推理小説のなかの動物	419
解説	423
安間隆次	

雪
の
螢

ほ
た
る

凶原虫

1

「おい、あの鳴き声は何だね」

男は部屋に入って来ると同時にたずねた。玄関ドアを開けたとたん、びよびよとやかましいさえずりが耳に迫った。

「あんまり可愛^{かわい}いので、近くの養鶏場からもらって来ちゃったのよ」

女は、ベランダの日当たりのいい所へおいてあった鳥かごの所へ男を導いた。覗^{のぞ}いてみると、数羽のひよこが体を寄せ合って精一杯さえずっている。

「こんなものもらってきて、どうするつもりなんだ」

男はあきれ顔で女を見た。

「どうするって飼うつもりよ」

「本気なのか」

「本氣よ」

「すぐ死んじゃうぞ」

「大丈夫よ。これから暖かくなるし、温度を調節してやれば、育つわよ」

「大きくなったらどうするつもりだ。うるさいし、臭いし、近所から文句が出るぞ」

「近所だってペットを飼っているわ。犬や猫は禁止されているけど、おうむや鳩はとを飼っている家だってあるわよ。それに大きくなったら養鶏場で引き取ってくれるというのよ」

「それにしてもひよことはね」

「可愛いじゃないの。いまに自家製の卵を食べさせてあげるわよ」

「他の鳥に替えられないのか、カナリヤとかインコのような。いまに始末がつかなくなるぞ」

「もうもらって来ちゃったんだもの、いまさら返せないわよ。大丈夫、あなたに迷惑をかけないわ」

「もう迷惑をうけている。そばでびよびよさえずられたら、おちおちできやしない」
「あなたはそうおっしゃるけど、動物がいっしょに生活していると、とても気持ちが

和むのよ。家族と同じだわ。家に帰れば、奥さんやお子さんに囲まれているあなたには、わからないでしょうけど」

「それは言わない約束だろう」

「だからいいでしょう、飼っても。あなたのいない間、このひよこが私を守ってくれるのよ」

「旅行にも出かけられなくなるぞ」

「そういうときはサトの養鶏場で預かってくれるというのよ。ね、おねがい。いいでしょ」

女は、男の顔の前に手を合わせた。男は仕方がないという表情ですでに許容していた。

女の生活を経済的には保証してやれても、その心の底の孤独までは、埋めてやれない。

ひよこが、せめてそれを埋めるパッキングの代用になればとおもったからである。

「あなた、大変！」

交換から取り次がれた電話に、いきなり夏子^{なつこ}の切迫した声が飛び込んできた。夏子が勤め先へ電話をかけてきたのは初めてである。

菅野^{すがの}は慌て^{あわ}てて周囲をうかがうと、送話器の口を手で抑えて、

「だめじゃないか、銀行へ電話をしてきてはいけないと言ってあるだろう」と抑えた声で叱^{しか}った。

「ごめんなさい。でも大変なことが起きたのよ」

夏子の声は、いまにも泣きだしそうである。おそらく電話口で半ベソをかいているのだろう。

「いったい、どうしたんだ」

菅野は、いやな予感を抑えて聞いた。

「空巢に入られたのよ」

「なに！ 空巢に」

おもわず高くした声を慌てて抑えて、

「いつ侵^はられたんだ？ それで何を盗^とられた」

「昨日よ、夕方買い物に出ていた間にやられたらしいのよ」

「いままで気がつかなかったのか」

「ごめんなさい。今朝になってから、どうもベランダのサッシ戸の鍵の具合がおかしいなあとおもってよく見ると、こわされているの。ハッとして簞笥^{たんす}を調べたら、きれいなもっていかれてるのよ」

「いくら盗られたんだ」

「三十万ほどだとおもうわ」

「そんなにおいていたのか」

「買いたい着物があつたので銀行から下^おろしたばかりなのよ」

「他に盗られたものはないか」

「現金だけだとおもうけど」

菅野はいくぶんホッとしながらも、

「それで例のものは大丈夫か」

「例のもの？」

「ほら、写真だよ、きみとぼくとの……」

「ああ、あの写真ね、まだそこまで見ていないわ。お金を盗られたのでびっくりしてしまつて」

「馬鹿！ 早く確かめるんだ。あれをもっていかれたら、コトだぞ」

男と女の価値の力点のちがいに舌打ちしながらも、菅野は急速に脹れ上がる不安にその場に座っていられないほどだった。たしか例の写真は簞笥の金のしまい場所の近くに入れておいたはずである。

「ちよつと待つて。すぐ調べてみるわ」

いま半ベソをかいていた夏子が、のんびりした口調で言つて、少しの中断の後、
「ないわよ、やっぱり」

と意外にしゃらつとした声で言つた。

「ないですませられるか、どこか他にしまつておいたんじゃないのか」

「いいえ、たしかに上から二番目の抽出しひきだに入れておいたわ。きつと空巢くわうがお金とい

っしょにもっていったのよ」

「おまえ、よくそんなにのんびりしてられるな」

女には、金よりも写真を盗られた事実のほうが重大な意味をもつことがわかっていない様子であった。もっとも写真を公表された場合、失うものは菅野のほうがはるかに大きい。

「のんびりなんかしていないわよ。このお部屋に留守中、泥棒が侵ったとおもうと、恐くて恐くてたまらないの。だからいけないのを承知でお電話したんじゃないの」

夏子はふたたびベソをかいた。

「警察へは連絡したのか」

「まだよ、とにかくあなたに一番に報せようとおもって」

「よかった。これからすぐ行くから、だれにも報せずに待っているんだ。現場にも、それ以上手を触れないように」

「早く来て、私、恐いわ」

夏子の言葉を途中に、菅野は電話を切った。